



Title	弥生時代～古墳時代における竪穴住居建築材の変遷 : 鳥取県域の調査例を中心に
Author(s)	高田, 健一
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 141-150
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

弥生時代～古墳時代における竪穴住居建築材の変遷

—鳥取県域の調査例を中心に—

高 田 健 一

はじめに

上屋が燃えて建築材が炭化した状態で見つかる竪穴住居跡は、山陰地方、とりわけ鳥取県内で多数調査されており、最近の牧本哲雄の集成によると 339 例を数える（牧本 2023）。そのうち 4 割強の 150 例は、何らかの形で樹種同定が行われており、弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居建築材の変遷を辿る上での基礎資料を提供している（表 1）。小論では、そのような調査・分析を踏まえ、竪穴住居建築材の樹種選択の変化とその背景について考えたい。

1. 分析の前提

検討を進める前に、いくつかの前提に触れておく。まず、樹種同定は出土したすべての材について行われるわけではない。調査に伴う様々な制限や調査者の視点にも左右されており、おおまかな傾向を指摘するにとどまらざるを得ない。分析に供された材が住居建築のどの部位であるかを明らかにしうる事例は 6 割ほどあるが、遺存しやすい竪穴辺縁部の垂木・扱首に偏り、他の部位に関する情報の解像度はあまり高くない。また、現場段階で部材の認識が不十分なために、同じ材を複数回同定していると考えうる事例もあって、数量の把握には注意が必要な面もある。網羅的に資料を検討するよりも、むしろ、出土状態が良好で、部位の特定も可能な資料に依拠する方が、よりクリアな議論が可能である。

したがって、竪穴住居建築の構造をよく残すと考えられる事例を整理し、どのような材が残っているのか整理しておくことが重要である。とりわけ、表 1 で網かけにした 26 例は、

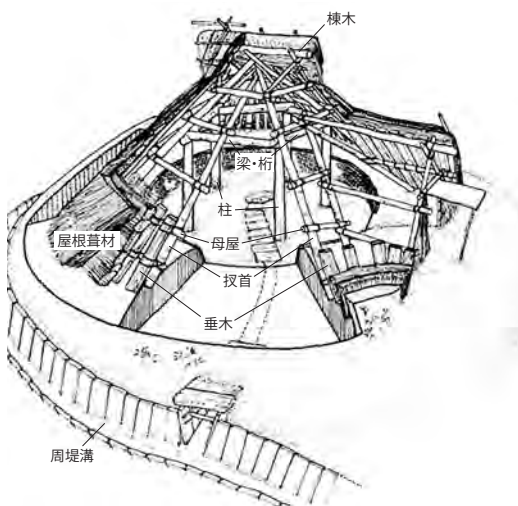


図1 竪穴住居建築の構造と部材名称

現場段階で各種部材の判定が詳細に行われたものを含み、この議論に欠かせない基礎資料である。

なお、小論は、竪穴住居建築の立体構造については、それらの基礎資料を多く参照した浅川滋男による研究と、妻木晩田遺跡における史跡整備で蓄積されてきた竪穴住居の復元研究を基礎に据えている（浅川 2001・2004・2013、濱田 2004、馬路 2011・2014）。

確実に残存例がある部材としては、柱、梁・桁⁽¹⁾、棟木、扱首、母屋、垂木、木舞、屋根葺材がある（図1）。柱は、柱穴内またはその直上で立位の炭化材が検出された場合に認定できる。まれに柱穴内で木材が遺存している場合もある。梁・桁は、柱上部を連結する横架材であるが、柱穴同士を結ぶラインに近接・平行して出土した部材で、柱と同様に太いものがそれと認定される場合が多い。なお、小論では、柱と梁・桁材を合わせて構造材と呼称し、垂木、扱首、母屋等の屋根材と区別する。イネ科草本と考えられる葺材は小論では扱わない。

垂木や扱首は、屋根材のうち竪穴の中央から外縁部に向かって放射状に伸びる部材である。垂木の形状は、板、半截丸太、丸太等多様であるが、密に配置されることが山陰の特徴とされる。しばしば屋根葺材の茅が直接付着している。妻木晩田遺跡の復元建築では、梁・桁に直接架構する丸太材の扱首を用いているが、実際の焼失竪穴住居跡で垂木と扱首を明確に区別することは難しい。調査段階で垂木とされたものの中にも、扱首が含まれている可能性がある。

屋根材には垂木とともに母屋がある。これは、扱首や垂木に対して直交し、かつ梁・桁とは異なる位置、形状で出土すると考えられる。垂木の下側に位置する部材であるが、保存状態が良好な垂木の下層で検出されない場合もあり、元々存在しないと考えられる場合もある。また、屋根葺材の固定などに用いる木舞と考える部材の検出例もある。垂木の上層で直交する細い部材がそれと認定できる。屋根頂部の構造は不明な点が多いが、土器絵画や家屋文鏡等の図像資料を元に、入母屋造りの外観が考えられている。そして、棟木の存在が想定されるのであるが、焼失住居跡の現場で棟木を特定することは困難で、認定された事例は極めて少ない。

住居構造とは無関係であるが、「内装」も存在している。竪穴部壁面に網代状の樹皮と考えられる炭化材が張り付いて出土した例がある。壁沿いに設置された杭状の部材は、そのような樹皮の固定に用いられたか、それ自体が壁面を構成したものと考えられる。これらが壁面付近で炭化して倒れ込んだ場合は垂木と区別がつかないが、細い棒状の材も散見される。また、竪穴部床面に中央土坑や溝が存在するが、これらにかけられた蓋板が存在する場合がある。

2. 竪穴住居建築材の樹種選択

樹種同定が行われた竪穴住居の一覧をみると、遺構の時期は、弥生時代前期～古墳時代終末期までであるが、分析例は時期的な偏りが大きい。とりわけ、弥生時代後期後葉の事例が突出し

表 1 樹種同定された焼失竪穴住居一覧（1）

No.	遺跡名	所在地	時期	住居名	部材：樹種
1	秋里（松下地区）	鳥取市	後期後葉	SI1	柱・桁：ヒノキ、壁材・礎板：スギ
2	秋里（松下地区）	鳥取市	後期後葉	SI3	スギ
3	西桂見（鷺谷口）	鳥取市	後期後葉	SI01	垂木：スギ、ミズキ、スダジイ
4	西桂見（鷺谷奥A区）	鳥取市	終末期	SI09	柱：ケヤキ、スギ、梁・桁：スダジイ、垂木：スギ、ヒノキ、ケヤキ、ミズキ、スダジイ、不明：トチノキ、ヒノキ
5	乙亥正屋敷廻	鳥取市	後期後葉	2S-1147	柱：クスノキ、垂木：スダジイ、壁材：スギ、スダジイ、クスノキ科
6	下坂本清合	鳥取市	終末期	SI1	柱・梁？：スダジイ、エノキ属、垂木：スギ、マツ、ゴンズイ、クリ、ニガキ、ヤナギ属、屋根葺材：イネ科
7	小浜ワラ畑	湯梨浜町	古墳中期	SI02	垂木？：ムクノキ、コナラ、ウリカエデ、フサザクラ
8	小浜ワラ畑	湯梨浜町	古墳中期	SI07	垂木？：スダジイ、コナラ、イヌマキ、板材？：マンサク
9	寺戸第2	湯梨浜町	古墳前期	SI-03	不明：スギ
10	寺戸第2	湯梨浜町	古墳前期	SI-05	垂木：スギ、不明：クリ
11	寺戸第2	湯梨浜町	古墳前期	SI-08	垂木：ヒノキ
12	石脇第1	湯梨浜町	古墳中期	SI-01	礎板？：スギ、不明：クリ
13	石脇第1	湯梨浜町	古墳中期	SI-07	梁・桁？：サワグルミ、ミツマタ
14	石脇第3（操り地区）	湯梨浜町	古墳前期	SI-02	垂木：スギ、母屋：シラキ、エノキ、カキ
15	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-246	スギ
16	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-249	マツ
17	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-250	ケヤキ
18	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-257	マツ
19	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-259	シキミ、ネジキ
20	長瀬高浜	湯梨浜町	古墳前期	SI-262	マツ
21	南谷大山	湯梨浜町	後期後葉	ASI-01	柱：スギ、スダジイ、梁・桁：スギ、ヒノキ、スダジイ、棟木：スギ、垂木・投首：スギ、スダジイ
22	南谷大山	湯梨浜町	終末期	BSI-01	柱：スダジイ、梁・桁：スダジイ、垂木・投首：クスノキ、スダジイ、タブノキ
23	南谷大山	湯梨浜町	古墳中期	BSI-09	垂木：スギ、ケヤキ、スダジイ
24	南谷大山	湯梨浜町	古墳前期	BSI-20	梁・桁：ケヤキ、スダジイ、母屋：カン類（シラカシ？）、垂木：スギ、クリ、ヤマグワ、タブノキ、スダジイ、木舞：ムクノキ
25	南谷大山	湯梨浜町	後期後葉	CSI-01	ツブラジイ、クスノキ
26	南谷大山	湯梨浜町	古墳前期	CSI-02	スギ、スダジイ
27	南谷大山	湯梨浜町	古墳前期	CSI-04	柱：イヌシデ
28	南谷大山	湯梨浜町	古墳前期	CSI-12	スダジイ、ツバキ、ツブラジイ
29	南谷大山	湯梨浜町	後期後葉	CSI-13	シラカシ
30	南谷大山	湯梨浜町	古墳中期	CSI-21	垂木：ホオノキ、スダジイ、シラカシ、木舞：スダジイ
31	丸山	三朝町	古墳前期	SI-19	クリ
32	丸山	三朝町	終末期	SI-26	スギ、ヒノキ
33	夏谷	倉吉市	古墳前期	B地区1号住居	クスノキ科、アカガシ亜属
34	夏谷	倉吉市	古墳前期	B地区2号住居	クリ、シイ属、ケンボナシ属、クスノキ科
35	夏谷	倉吉市	古墳中期	B地区7号住居	コナラ節、ヤブツバキ、クスノキ科
36	夏谷	倉吉市	古墳中期	B地区13号住居	クリ、サクラ属、アカガシ亜属、ニレ属、ケンボナシ属
37	夏谷	倉吉市	古墳中期	B地区18号住居	モチノキ属、サカキ、シイ属、アカガシ亜属
38	夏谷	倉吉市	後期後葉	B地区39号住居	トネリコ属、アカガシ亜属、アサダ、シイ属
39	夏谷	倉吉市	後期後葉	B地区41号住居	シイ属、クリ、ニガキ、ケヤキ
40	夏谷	倉吉市	古墳中期	CSI-46	ムクロジ、ヤマグワ
41	沢ベリ3次	倉吉市	後期中葉	1号住居	梁・桁？：クワ属、モクレン属、垂木？：クリ、キハダ
42	中尾	倉吉市	前期後半	平地式住居	クリ、コナラ節（コナラ）、シイ属（スダジイ）
43	中尾	倉吉市	中期後葉	2号方形土坑	エノキ属、ヤブツバキ、コナラ節、ヤマモガシ、ヤマグワ、マタタビ属、ヒノキ属、シイ属、アカガシ亜属、トチノキ、ウツギ属、サカキ
44	中尾	倉吉市	後期前葉	2号住居址	クリ、コナラ節（コナラ）、シイ属（スダジイ）
45	中尾（2次）	倉吉市	中期後葉	1号	柱：コナラ節、クスノキ科、サクラ属、垂木：クワ属、スギ、コナラ節
46	中尾（2次）	倉吉市	中期後葉	4号	垂木？：スギ、ツバキ属
47	中尾（2次）	倉吉市	中期後葉	11号	柱？：アカガシ亜属
48	中尾（2次）	倉吉市	中期後葉	12号	垂木：クワ属、スダジイ、クスノキ科
49	頭根後谷	倉吉市	古墳中期	SI-03	モチノキ属、アカガシ亜属、シイ属、サクラ属、クスノキ属、サカキ、ヤマグワ、ヤブツバキ、シキミ、スギ、クリ、マツ、エゴノキ属、クマシデ属
50	頭根後谷	倉吉市	古墳中期	SI-07	スギ、シイ属、サクラ属、ミズキ属、ヤマグワ、サカキ
51	長谷遺跡	倉吉市	終末期	2区2号住居址	柱：マツ属、ヒノキ属、その他：マツ属、ヒノキ属、クリ、ケヤキ、シイノキ属
52	両長谷遺跡	倉吉市	後期後葉	3号住居	シイノキ属
53	両長谷遺跡	倉吉市	後期後葉	4号住居	ハイノキ属

表1 樹種同定された焼失竪穴住居一覧(2)

No.	遺跡名	所在地	時期	住居名	部材：樹種
54	両長谷遺跡	倉吉市	後期後葉	5号住居	モクレン属
55	両長谷遺跡	倉吉市	後期後葉	9号住居	垂木・梁・桁?：ヤマグワ、モクレン属、シイノキ属
55	両長谷遺跡	倉吉市	後期後葉	9号住居	垂木・梁・桁?：ヤマグワ、モクレン属、シイノキ属
56	服部	倉吉市	後期後葉	2号住居	コナラ、クスギ、ヤマザクラ、イヌシデ、シラカシ、シイ
57	服部	倉吉市	後期後葉	4号住居	コナラ、ヤマザクラ、カエデ、イヌシデ、シラカシ、シイ
58	服部	倉吉市	後期後葉	7号住居	コナラ、クスギ、ヤマザクラ、カエデ、シラカシ、シイ
59	大仙峯	倉吉市	後期後葉	SI01	垂木?：シイ属、広葉樹
60	下張坪	倉吉市	終末期	C地区2号住居	クマノミズキ、アカガシ亜属、ヤマグワ
61	下張坪	倉吉市	終末期	C地区3号住居	モチノキ属、スダジイ、ヒノキ属、エゴノキ属
62	下張坪	倉吉市	終末期	C地区5号住居	広葉樹
63	下張坪	倉吉市	終末期	C地区8号住居	柱：タブノキ属、垂木?：スダジイ、アサダ、シャシャンボ、タブノキ属
64	下張坪	倉吉市	終末期	C地区9号住居	サクラ属
65	下張坪	倉吉市	終末期	C地区11号住居	ヤマグワ、アカガシ亜属
66	下張坪	倉吉市	終末期	C地区1号土坑	スダジイ、タブノキ属、カヤ、アカガシ亜属
67	横谷	倉吉市	古墳後期	竪穴式住居	壁材：クリ、エゴノキ属
68	尾田中峰	倉吉市	後期中葉	1号竪穴建物	垂木?：クワ属、サクラ属
69	井図地中ソネ	琴浦町	後期後葉	SI9	柱?：クリ、ケヤキ、梁・桁：ヤマグワ、クリかスダジイ、垂木：クリ、ヤマグワ、ウリハダカエデ、
70	笠見第3	琴浦町	古墳中期	SI3	板状(中央Pit蓋?):スキ、ネムノキ?、垂木?:ヤマザクラ?、クロモジ?、アカガシ亜属、スダジイ、ヤブツバキ
71	笠見第3	琴浦町	後期後葉	SI30	柱：クリ、垂木：クリ、スダジイ?、クスノキ、木舞?：クスギ類、梁・桁：クスノキ
72	笠見第3	琴浦町	終末期	SI48	垂木：クリ、ケヤキ、スダジイ
73	笠見第3	琴浦町	後期後葉	SI90	垂木：クリ、スダジイ
74	笠見第3	琴浦町	後期後葉	SI95	棟木?：クリ、クスノキ、垂木：クリ
75	笠見第3	琴浦町	後期後葉	SI97	垂木：ヤマグワ、ミツバウツギ、母屋?：アカメガシワ、屋根葺き材：アシ
76	笠見第3	琴浦町	古墳中期	SI108	垂木?：クスギ類、クスノキ
77	笠見第3	琴浦町	後期前葉	SI120	柱：タブノキ、梁・桁：タブノキ、垂木：クリ、木舞：クリ
78	笠見第3	琴浦町	後期前葉	SI153	梁・桁?：スダジイ、垂木：スダジイ、棟木?：スダジイ
79	笠見第3	琴浦町	後期中葉	SI157	柱：サクラ属、梁・桁：タブノキ、垂木：スダジイ、ヤマグワ、棟木?：タブノキ
80	笠見第3	琴浦町	古墳前期	D区 SI9	垂木：クリ、母屋?：クリ
81	笠見第3	琴浦町	後期後葉	D区 SI10	垂木?：スダジイ、クリ、エゴノキ属、母屋?：エゴノキ属、クリ
82	笠見第3	琴浦町	中期後葉	D区 SI15	垂木：スダジイ、梁・桁?：ケヤキ
83	笠見第3	琴浦町	古墳前期	D区 SI22	梁・桁?：サクラ属、クリ、垂木?：クリ
84	三林	琴浦町	古墳前期	SI10	垂木：クリ、屋根葺き材：イネ科
85	三林	琴浦町	後期後葉	SI31	柱：タブノキ、垂木：ヤマグワ、壁際部材：ムクノキ
86	三林	琴浦町	古墳前期	SI33	柱：クリ、壁際部材(投首か)：クリ、垂木：シイ属
87	久蔵峰北	琴浦町	古墳中期	SI51	柱：ケンボナンシ属、梁・桁?：スダジイ、壁際材：ツバキ属
88	蜷谷	琴浦町	後期後葉	SI1	垂木?：クリ
89	久蔵谷	琴浦町	古墳前期	SI2	梁・桁：クリ、垂木：クリ、スダジイ
90	上伊勢第1	琴浦町	前期後半	竪穴住居3	垂木：ニガキ、ヤマグワ、クスノキ科
91	梅田萱峯	琴浦町	中期後葉	1区 SI3	垂木か(半截丸太・板状)：スダジイ、クスノキ科、梁・桁か(丸太)：ニガキ、ツバキ属
92	梅田萱峯	琴浦町	中期後葉	1区 SI6	梁・桁：ツバキ属、垂木か(半截丸太)：スダジイ、カラスザンショウ、母屋か(半截丸太・丸太)ニガキ、ツバキ属
93	梅田萱峯	琴浦町	中期後葉	1区 SI8	垂木?：ムクロジ、梁・桁?：イヌガヤ
94	梅田萱峯	琴浦町	後期中葉	4区 SI20	シイノキ属、アカガシ亜属
95	梅田萱峯	琴浦町	中期後葉	4区 SK100	垂木?：アカガシ亜属
96	梅田萱峯	琴浦町	古墳中期	6区 SI45	垂木?：アカガシ亜属、スダジイ、クスギ節
97	梅田東前谷中峯	琴浦町	後期後葉	SI2	柱：クスノキ、垂木：シイノキ属、クワ属、スギ
98	筥津乳母ヶ谷第2	琴浦町	後期後葉	SI3	垂木：クリ、その他：ヤマグワ、クリ、クスノキ科
99	筥津乳母ヶ谷第2	琴浦町	後期後葉	SI9	コナラ節
100	化粧川	琴浦町	中期後葉	SI1	柱：ヤマグワ、ヤブツバキ、垂木：ヤマグワ、ヤマザクラ、クリ、アカガシ亜属、スダジイ、ヤブツバキ、母屋?：クリ、スダジイ
101	化粧川	琴浦町	中期後葉	SI3	ヤマグワ
102	下市築地ノ峯東通第2	大山町	終末期	第1竪穴住居	イヌシデ節、クスギ節、コナラ節、スダジイ、クリ、ケヤキ、クスノキ科
103	赤坂小丸山	大山町	後期中葉	竪穴建物1	柱：クスノキ科、梁・桁：ヤマグワ、スダジイ、ユクノキ、垂木：ユクノキ、クリ、その他：ユクノキ、ヤマグワ
104	殿河内定屋ノ前	大山町	中期後葉	SI3	垂木：クリ、その他：ヒノキ、スダジイ、モクレン属、クスノキ科、ヤマグワ

表1 樹種同定された焼失竪穴住居一覧（3）

No.	遺跡名	所在地	時期	住居名	部材：樹種
105	殿河内定屋ノ前	大山町	中期後葉	SI9	垂木：クリ、スダジイ、クスノキ科、ニガキ、梁・桁：カヤ、ケヤキ、その他：ケヤキ
106	倉谷西中田	大山町	後期後葉	SI1	垂木？：クリ、クスノキ科
107	退休寺第1	大山町	後期後葉	竪穴住居	梁・桁：タブノキ属、クリ、垂木：クリ
108	退休寺第1	大山町	後期	N-SI02	エノキ属
109	名和飛田	大山町	古墳後期	竪穴2	垂木？：広葉樹、ケヤキ、アカガシ亜属、ヌルデ近似種
110	名和中畝	大山町	後期後葉	竪穴住居3	スダジイ、クリ、ヤマグワ、クスノキ科
111	茶畑六反田（0・5区）	大山町	中期後葉	竪穴住居1	柱：アカガシ亜属、ツバキ属、垂木：モミ属
112	茶畑六反田（0・5区）	大山町	中期後葉	竪穴住居2	柱：ヤマグワ、垂木：ヤマグワ
113	茶畑六反田（0・5区）	大山町	後期後葉	竪穴住居3	柱：クリ、垂木：クリ
114	茶畑六反田（4・5区）	大山町	中期後葉	竪穴住居2	梁・桁？：アカガシ亜属、垂木：サクラ属、アカガシ亜属
115	茶畑六反田（4・5区）	大山町	中期後葉	竪穴住居3	垂木？：クリ、クスギ節、母屋？：トネリコ属
116	押平尾無	大山町	終末期	竪穴住居8	スダジイ、ヤマグワ、葺材：イネ科
117	押平尾無	大山町	終末期	竪穴住居9	垂木：クスノキ科、アカガシ亜属、葺材：イネ科
118	押平尾無	大山町	古墳前期	竪穴住居10	梁・桁？：クリ
119	古御堂笹尾山	大山町	古墳中期	竪穴住居18	梁・桁：ヤブニツケイ、モクレン科、垂木？：ヌルデ、その他：ヤマグワ
120	古御堂笹尾山	大山町	古墳中期	竪穴住居22	柱：ケヤキ、ツバキ、梁・桁？：ヤマザクラ、クスギ、コナラ、垂木？：クリ、サカキ、クスギ、ヤブニツケイ、ハンノキ、木舞？：アカメガシワ、ケヤキ
121	古御堂笹尾山	大山町	古墳中期	竪穴住居23	柱：ハンノキ、ホオノキ、ケヤキ、梁・桁？：スダジイ、ハンノキ、垂木：ケヤキ、ハンノキ、ホオノキ、アカメガシワ、母屋：ホオノキ、ハンノキ
122	古御堂笹尾山	大山町	古墳中期	竪穴住居27	垂木：クリ
123	古御堂笹尾山	大山町	古墳中期	竪穴4	スダジイ、クリ、ホオノキ、ヤマザクラ
124	古御堂新林	大山町	後期後葉	竪穴住居2	梁・桁：クスノキ科、垂木：クリ、スダジイ
125	門前上屋敷	大山町	中期後葉	竪穴住居1	柱：広葉樹
126	門前第2（菖蒲田地区）	大山町	終末期	竪穴住居1	クリ、スダジイ
127	門前第2（菖蒲田地区）	大山町	古墳中期	竪穴住居10	柱：クリ、スダジイ
128	門前第2（菖蒲田地区）	大山町	古墳中期	竪穴住居12	垂木？：スダジイ、ツバキ属、エゴノキ属、その他：サカキ、クスノキ科、カエデ属
129	妻木晩田・松尾頭	大山町	後期後葉	SI-97	シイノキ属
130	妻木晩田・松尾頭	大山町	古墳前期	SI-105	ケヤキ
131	妻木晩田・松尾頭	大山町	後期後葉	SI-125	クリ
132	妻木晩田・妻木山	大山町	後期後葉	MKS143	垂木：クリ、スダジイ
133	妻木晩田・妻木山	大山町	後期中葉	5区 SI157	ケヤキ、クリ、ケンボナシ属、クスノキ科
134	妻木晩田・妻木山	大山町	後期後葉	5区 SI161	柱・又首・垂木：クリ、垂木：ケヤキ、クスノキ、その他：ムクノキ、カエデ属、サクラ属、クワ属、ミズキ属
135	妻木晩田・妻木山	大山町	後期後葉	5区 SI166	ケヤキ、モモ、広葉樹
136	妻木晩田・妻木山	大山町	後期前葉	6区竪穴状遺構	スダジイ、広葉樹、屋根葺材：イネ科タケ亜科
137	妻木晩田・妻木山	大山町	終末期	6区 SI172	ケンボナシ属、クスノキ科
138	妻木晩田・妻木山	大山町	後期後葉	6区 SI173	サクラ属、コウゾ属、スダジイ
139	古市宮ノ谷山	米子市	後期後葉	SI-7	垂木他：スギ、スダジイ、壁材・敷物：ヒノキ、葺材：ススキ
140	吉谷中馬場山	米子市	後期後葉	竪穴住居5	柱：クリ、ヒノキ属、梁・桁：スダジイ、垂木：クリ、板材：スダジイ、クスノキ科、クリ、屋根葺材：タケ亜科
141	諏訪西山ノ後	米子市	後期中葉	竪穴住居1	垂木：クスギ節、コナラ節、シイ属
142	諏訪西山ノ後	米子市	後期前葉	竪穴住居3	柱：クスノキ、垂木：クリ、アカガシ亜属、壁際材：ケヤキ、ヤマグワ、エゴノキ
143	諏訪西山ノ後	米子市	古墳前期	竪穴住居7	梁・桁：クリ、垂木：クリ、ブナ科
144	諏訪西山ノ後	米子市	後期中葉	竪穴住居15	クリ、ケヤキ、クスギ節、サンショウ属
145	諏訪西山ノ後	米子市	後期前葉	竪穴住居16	クスノキ科、ケヤキ、ヤマグワ、サクラ属、クスギ節、コナラ節
146	喜多原第5	米子市	終末期	竪穴住居2	垂木：コナラ節
147	小町石橋ノ上	伯耆町	古墳後期	SI2	ケヤキ
148	小町石橋ノ上	伯耆町	古墳後期	SI3	垂木？：アカガシ亜属（シラカシまたはウラジロガシ）
149	坂長越城ノ原	伯耆町	終末期	3区竪穴建物1	垂木・又首：クリ、シイノキ属、カエデか、ケヤキ、ウルシ属、ブナ、アカガシ、木舞？：マツ属、コナラ亜属、ヤナギ属
150	坂長越城ノ原	伯耆町	不明	3区竪穴建物2	垂木：クリ、ヤマグワ、ウルシ属、ケヤキ、カエデ属

て多い。これは、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする丘陵上の集落遺跡の発掘調査例が多いという事情が反映している。しかし、弥生時代中期以前の事例も、古墳時代中期以降の事例もそれぞれ2割程度は存在し、通時的な変化をみることが困難というほどではない。牧本哲雄の分析を参考にとすると、各時期における焼失住居の存在率は、調査された竪穴住居数が多いほど低くなり、数%程度と考えられる（牧本 2008）。調査された竪穴住居数を考慮すると、焼失住居数そのものに時期的な偏りはないと考えられる。

表1から読み取れることを整理しよう。弥生時代～古墳時代を通じて、シイ属（スダジイ）とクリは最も多用される樹種で、柱、梁・桁、垂木等主要な部材として使われる。他にスギ、クスノキ・タブノキ⁽²⁾、サクラ属（ヤマザクラ）、ケヤキ、クワ属（ヤマグワ）、アカガシ亜属も各時期を通じて利用頻度が高く、やはり構造材・屋根材ともに使われる。これらの樹種は、中国地方の潜在自然植生と概ね一致するから、周辺の自然林から入手したものであろう。

建築材の使用部位が判明する場合の主な利用樹種は、表2のとおりである。これによると、柱はクリやクスノキ・タブノキが多い。これらは、いずれも堅牢性や耐久性に優れ、建築材として利用されてきた歴史がある樹種である。弥生時代、古墳時代においてもそのような特性にもとづく選択性があったと考えられる。

梁・桁は、柱材同様にクリやクスノキ・タブノキも多いが、スダジイが最も多く、必ずしも柱の樹種とは一致していない。柱と梁・桁がともに同定された事例では、樹種が異なるものが多い。柱も梁・桁材も、一定の長さや太さを有し、振れや曲りが少ないものを、他の部材に比べて選択する必要がある。建築材の調達の際、数種類の木材を伐採するか、古材を再利用すると思われるが、構造材のすべてを好条件の同一樹種で揃えるのは難しかったとみておきたい。

垂木（収首も含む）は、焼失住居の中でも最も残りやすい部材のため、分析事例も多い。樹種はスダジイ、クリが突出して多く、クスノキ・タブノキも一定量ある。これらは柱や梁・桁といった構造材の調達とともに切り出され、構造材に使用された主要な幹以外が利用されたと考えられよう。一方、スギ、ケヤキ、クワ属（ヤマグワ）、アカガシ亜属は、構造材への利用は少なく、垂木や壁際の材には多用される傾向がある。これはどのように考えるだろうか。

想起されるのは、これらがいずれも容器や農具など建築以外の用途でも多用される樹種であるという点である。最良の部分は容器や農具として使用し、残りの部分を住居建築に使用したということではないか。例えば、青谷上寺地遺跡等で出土する木製高坏は、すべて横木取りであり、口径が30cmを超えるものも多いことから、少なくとも直径60cm以上になるヤマグワやケヤキの大径木が使用されたと考えられている（野田ほか 2005、茶谷 2013）。そのような大径木を得やすいのはやはり丘陵地の森林であり、その周辺に立地する遺跡が木材の主要な供給地であったと考えられる⁽³⁾。丘陵上の焼失住居から、これらが構造材としてではなく、屋根材の一部として出土することは、木材供給集落としての性格を反映する可能性がある（高田 2007・

表2 樹種と使用部位の関係

	マ ツ	ヒ ノ キ	ス ギ	クスノキ・タブノキ	ホオノキ	アカメガシワ	ヤナギ	ユクノキ	サクラ属	ケヤキ	エノキ	ムクノキ	クワ属	ク リ	コナラ節	クスギ節	シイ属	アカガシ亜属	ハンノキ	ニガキ	ツバキ属	エゴノキ属	その他
柱	1	3	2	8	3	-	-	-	2	4	1	-	2	7	1	1	4	3	1	1	3	-	1
梁桁	-	1	1	6	-	-	-	-	2	3	-	-	3	6	1	-	9	1	1	-	2	-	4
垂木・壁際	1	3	14	16	3	1	1	1	4	9	-	2	15	36	5	5	37	11	2	3	7	4	20
母屋・木舞	1	-	-	-	1	2	1	-	-	1	1	1	-	3	1	1	2	1	1	1	1	1	3

2021)。焼失住居出土の炭化材は、この時代の木材資源利用や流通形態を復元する重要な手がかりともなると考えられよう。

なお、柱材となった樹種は18種、梁・桁材は16種であるのに対して、垂木や壁際材に用いられる樹種は全体で41種と極めて多様性に富んでいる。このことは、構造材に対しては一定の選好が働いていることを示すとともに、竪穴住居建築が非常に多くの木材を必要とし、その材料が幅広く調達されたことを物語っているのであろう。

3. 竪穴住居建築材の変遷

次に、時期別に建築材の樹種を見てみよう。先述したように、時期ごとの資料数に偏りが大きい。弥生時代前期段階は2遺跡2住居しか分析例がなく、中期前葉、中期中葉の事例は鳥取県内にはない。ここでは、管見に触れた島根県東部の中期中葉の2遺跡（田和山遺跡 SI09、暮地遺跡 2号住居）も加えておこう。これによって分析点数は38点となる。

一方、弥生時代中期後葉段階は遺跡数も増加し、7遺跡19住居から124点の分析例がある。後期前葉は4遺跡6住居から81点、後期中葉は7遺跡8住居から77点、後期後葉段階は最も多く、21遺跡40住居から356点、終末期は13遺跡20住居から255点の分析例がそれぞれある。古墳時代前期は、13遺跡26住居から117点、中期は9遺跡22住居から234点あるものの、後期は事例数が少なく、3遺跡4住居から11点の分析例しかない。

なるべく分析点数の差が小さくなるよう、弥生時代前期と中期中葉を弥生Ⅰ～Ⅲ期とする。中期後葉は弥生Ⅳ期、後期前葉と中葉を弥生Ⅴ期前半とする。後期後葉は弥生Ⅴ期後半、終末期は弥生Ⅵ期である。古墳時代は、前期と中・後期に二分する。このような7段階の時期区分によって、竪穴住居建築材の変遷をみてみよう（図2）。各段階の分析点数のうちどの程度の比率を示すかをセリエーション図で示した。比率が1%に満たない樹種は省略している。

改めて指摘できるのは、クリとシイ属（スダジイ）の利用率の高さである。弥生Ⅳ期においてクリの比率が低下している理由はよくわからないが、多くの時期で20～30%程度の比率を

占める。構造材から屋根材に至るまで使用され、堅穴住居建築材のベースをなしている。これらと同様に、比率は低いながらも、どの時期にも利用される樹種としては、クスノキ・タブノキ、サクラ属、ケヤキ、コナラ、アカガシ亜属がある。これらも構造材に使用されることが多いので、建築材としては重要な位置を占める樹種といえよう。

一方、時期によって変動を示す樹種も存在することに気づく。目につくのは、クワ属（ヤマグワ）で、弥生時代後期前半までは10～20%と比較的高い比率を示すが、後期後半以降は2、3%程度まで大きく比率を減らす。また、中期後葉まである程度利用されながら、それ以降ほとんどみなくなる樹種としては、クルミ科、ムクロジ、トチノキ、ニガキ、キハダ属等がある。これらが後期後半以降用いられなくなる理由は定かでないが、山陰において大規模な集住集落の形成が始まる前後で堅穴住居建築材の選好に変化がある点は興味深い。

また、弥生時代後期後半以降、スギが一定の割合で利用される。これらは板材で出土することが多く、垂木以外に、扉や蓋と考えられる出土状態のものもある。鉄製工具の普及に伴って針葉樹の利用が増えると考えられるが、後期後半以降の状況はその反映とみたい。

古墳時代以降では、マツ、シキミ、ハンノキ、ヌルデ、ネジキ、カキ、サカキ、ヤブツバキ、ミズキ、モチノキ属等、他の時期にはみられない樹種が散見される。これらのほとんどは構造材ではなく、垂木や用途不明材として検出されたものだが、シキミ、ネジキ、カキ等のように建築には適さないものを含んでいる。これらが出土する遺跡は、海岸砂丘に立地する長瀬高浜遺跡等が含まれるので、時期差よりは、遺跡周辺の森林の内容の差に起因するのかもしれない。

分析例の少ない弥生Ⅰ～Ⅲ期（13種）を除くと、弥生Ⅳ期～古墳時代前期までは21種～29

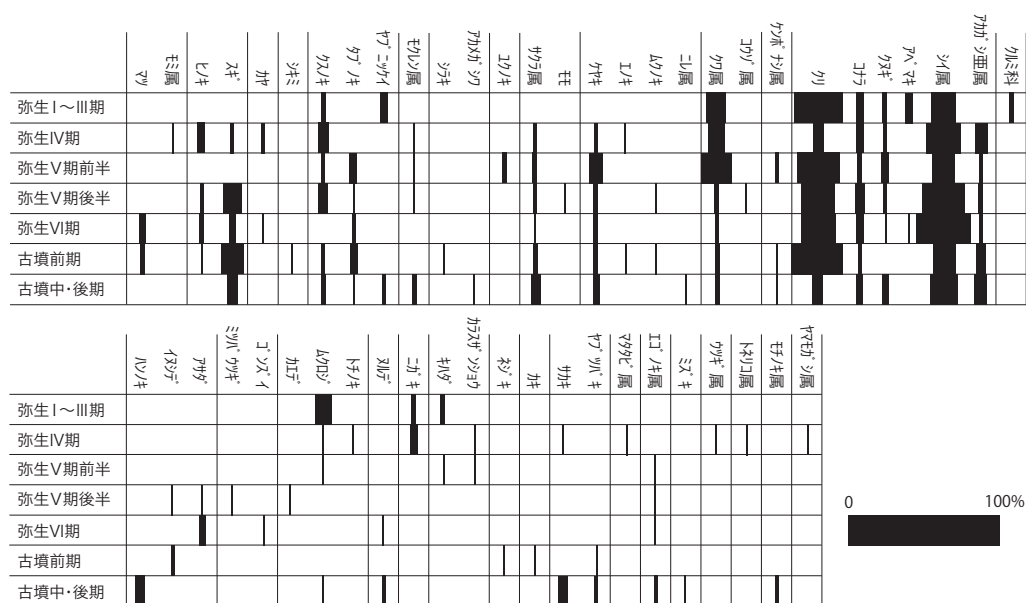


図2 堅穴住居建築に用いられた樹種の変遷

種程度の樹種を利用しているが、古墳時代中期以降は、38 種と利用樹種が大幅に増える。この時期の焼失住居がある遺跡は、笠見第 3 遺跡に代表されるように、前代から長期に居住が続いてきた遺跡も多い。馬路晃祥は、史跡整備における復元事例を踏まえつつ、竪穴住居 1 棟の建築には 40 本もの用材の伐採が必要であり、3 割程度が再利用されたとしても、繰り返される樹木利用によって皆伐的な環境が形成される可能性があるとしている（馬路 2006）⁽⁴⁾。居住期間が長くなれば、遺跡周辺の自然植生は大きく変化して良質材が入手しにくくなる事態も考えられる。竪穴住居建築材の樹種利用の変化は、人為的な自然環境の改変の程度を測る指標にもなるだろう。

おわりに

焼失住居出土の建築材は、建築遺構としての竪穴住居の復元に必要なだけでなく、木材という大型の有用資源の利用、加工技術、流通形態を知る重要な手がかりになり、また、遺跡を取り巻く自然環境と人間の相互関係を紐解く貴重なデータともなる。小論がそのような問題意識に少しでも貢献できたとすれば、幸いである。

註

- (1) 竪穴住居建築では、短軸方向の梁と長軸方向の桁を区別できないものが多い。小論では、柱とともに基本構造を支える横架材を梁・桁と呼ぶ。
- (2) ここでは、種レベルのクスノキ、タブノキ、ヤブニッケイに加えて、クスノキ科と同定されたものをクスノキ・タブノキとしてまとめた。
- (3) ただし、スギ材・スギ皮の利用は、青谷上地遺跡をはじめとして低地の遺跡で格段に高く、枝打ち等の調整も低地で行われていることが窺える。したがって、スギ材の利用は低地が中心であったろう。板材に加工されたものが丘陵地に持ち込まれたと考えられる。
- (4) 馬路の想定はやや過剰な見積もりかもしれない。史跡整備で復元する竪穴住居は、安全性や管理上の観点から検出された柱痕よりも木柄を太くしているほか、弥生時代ならば端材で済ませる分も調達している。したがって、伐採量はもっと少なかっただろう。また、古材の利用も盛んであったことは、青谷上寺地遺跡出土の建築材、船材等の大型材が様々な場所で再利用されていることから想定できる。

引用・参考文献

- 浅川滋男 2001「弥生高地性集落の焼失住居―山陰地方の 3 つの事例から―」『竪穴住居の構造と空間』国際日本文化研究センター、京都：pp. 117-131

- 浅川滋男 2004「住居の始原—東方アジア民族建築の先史学的パースペクティヴ—」『弥生のすま
いを探る—建築技術と生活空間—』第5回弥生文化シンポジウム 鳥取県教育委員会、鳥取：
pp. 4-12
- 浅川滋男 2013『建築考古学の実証と復元研究』同成社、東京
- 高田健一 2007「山陰における弥生時代集落景観—妻木晩田遺跡における集落景観復元の基礎作業を
通じて—」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・
大阪府立近つ飛鳥博物館共同研究成果報告書 2005 年度』財団法人大阪府文化財センター、大阪：
pp. 105-122
- 高田健一 2021「魏志倭人伝からみた弥生時代倭の天然資源」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦
記念論集—』中井正幸さんの還暦をお祝いする会、京都：pp. 93-102
- 野田真弓・茶谷 満（編）2005『木製容器・かご』青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 鳥取県
埋蔵文化財センター、鳥取
- 茶谷 満 2013「青谷上寺地遺跡出土の木製容器」『木製品から見た古代のくらし』島根県古代文化
センター、鳥取：pp. 49-61
- 濱田竜彦 2004「弥生時代の集落と建物の復元—妻木晩田遺跡と青谷上寺地遺跡—」『弥生のすま
いを探る—建築技術と生活空間—』第5回弥生文化シンポジウム 鳥取県教育委員会、鳥取：
pp. 14-26
- 牧本哲雄 2002「妻木晩田遺跡の焼失住居について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』鳥取県
教育委員会、鳥取：pp. 22-29
- 牧本哲雄 2008「鳥取県内弥生時代から古墳時代の焼失住居」『調査研究紀要』2 鳥取県埋蔵文化
財センター、鳥取：pp. 15-29
- 牧本哲雄 2023「鳥取県内原始・古代焼失建物について（補遺）」『調査研究紀要』15 鳥取県埋蔵文
化財センター、鳥取：pp. 55-60
- 馬路晃祥 2006「妻木晩田遺跡の自然環境と人々の関わり」『倭人の生きた環境—山陰弥生時代の人
と自然環境—』第7回弥生文化シンポジウム 鳥取県教育委員会、鳥取：pp. 10-15
- 馬路晃祥 2011「焼失住居からみた弥生時代の堅穴住居」『考古学研究』第58巻第3号、岡山：
pp. 80-91
- 馬路晃祥 2014「弥生時代の土屋根住居について—大江山麓を中心に—」『妻木晩田遺跡発掘調査研
究年報 2013』鳥取県教育委員会、鳥取：pp. 55-61

※紙幅の都合により、表1の元となる発掘調査報告書は割愛せざるを得なかった。ご寛恕賜りたい。